

イと言つて我らを喜ばせたが、一抹の不安があった。その不安が的中した。いつも利用していた下城子駅を通過しソ連に入り、貨車から降ろされたところはピロビジャン地区ロンドコ収容所で、駅に近いところであつた。

仕事は何回となく変わる。一番目の仕事は伐採で、三人一組の仕事はノルマ完遂で体力消耗し、一人が体調を崩したときは二人で頑張り何とかしのいだ。また、栄養失調で足元が不安定となり、小指ほどの木の枝に足を取られ転倒もしばしばであつた。特に冬期の伐採は骨身に染みみた。

また、石山での作業は、一輪車押しがなかなか出来ず、慣れるまでは苦勞の連続であつた。一輪車は初めて見る代物だつた。

次に変つた仕事は、コルホーズでの馬鈴薯植えてある。何十袋もの種芋を計算もせず植えてしまえと、気の遠くなるような話で、一人がスコップで穴を掘り、一人が種芋を入れて行く仕事で、単純な仕事ではあるが、泣かされた。一つの穴に種芋五、六個を入れ

たこともあり、春になつて一斉に芽を出し、責任者に強く叱られ罰を受け牢に入れられたこともあつた。

その他にもいろいろな仕事をしたが、辛い若い体力と精神力を支えられ、苦しく辛かつた二年間の抑留生活ともバイバイが出来て、昭和二十二年六月二十日、舞鶴港に無事上陸、復員することが出来た。

永い悪夢から目覚めたようであつた。
最後に、ソ満の永久凍土において尊い命を散華された戦友諸氏の冥福を心からお祈りいたします。

未踏の地での過酷な作業

熊本県 下田 繁 男

私は昭和二十年の八月一日に間島の航空隊に入りました。八月一日でするので、もう終戦までは十五日しかなかったわけです。軍籍そのものはほとんどもうわかっていないのですが、間島の航空隊から、通化を第一線に関東軍が来るというようなうわさで通化に汽車で移動

しており、その間汽車の中で、何か戦争はもう終わつたというようなうわさを聞いて、どうせ日本が勝つたんだらうというような思いでいました。しかし、通化の飛行場に着いたときに、すべての人が集合して、そこでそのときの隊長さんから、終戦の無条件降伏をしたというのを聞きました。時の天皇陛下の、耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍びというような意味の言葉に、何かこれは重大だなど若いながらも感じたのです。そして通化で全員武装解除を受けました。

吉林の貨車の駅に着いて、そこで私は軍隊を逃亡したので。そして一カ月余り地方人（民間人）になりました。ところが、居留民券を持たない人は生命、財産は保証できないから、近くの日本人学校の陽明学校に出頭すれば、そこで居留民券を渡すと言われました。それで行ったわけですが、夕方になってから、何か知らぬが団体を組んで引つ張られて、日本人学校の体育館のようなところで全員が一泊しました。それから、もう完全なソ連の管轄になったのです。

そして十月の中旬だったか、アメリカ製のほろをかぶったトラックに立ったままですし詰めにさせられて、満州からソ連へ、国境を越えて入りました。

雪が降る中を草原で、地面を一メートルぐらい掘って、そこにテントを張って、当分の間寝泊まりしました。そして仕事と言えば、満州から強奪した物資、いろいろなものを満州からトラックで次から次に運んで、ソ連領内に一品でも多く入れるために、国境からすぐそばのソ連領内におろして積み重ねる作業がまず第一番でした。

地名はもう記憶にないですが、ウラジオストックよりもうんと北の、それこそ前人未踏のところに入って伐採作業もしました。今思うと一番過酷な地域で、過酷な作業状態だったでしょう。ノルマを四立方メートルとかなんとかと言って、二人引きのノコギリで、しんまで凍っているシラカバのような針葉樹を倒すのです。動作が鈍い人は、逃げ切れずに木の下敷きになって死んだ人も相当おったようです。

ソ連も食うには困っておったのでしよう、いよいよ

我々の口に入るときはもう黒パンはとても小さいもので、スターリン給与で一人三百グラムとかなんとか言ったけれども、実際はその半分ぐらい。スープと言えばただ水に塩を入れたような何も入っておらんスープで、栄養失調で、食うことばかり頭にありました。

作業へ行くときは昼食の黒パンももらうのですが、朝から全部食ってしまったも、腹いっぱいになったという感覚は全然ありませんでした。待遇はこのとおりで、たばこも何もなく、葉っぱを吸いました。草や、あらゆるものを食べました。それからキノコなどを食った人が毒キノコで死んだりしたということも話に聞きました。

ただ、私は若い方だったもので、ちょうど教えて二十歳でしたから、割と体力はあった関係で、何とか危機を乗り越えてきたと思うのです。まあ、よく生きて帰ったなど、今不思議でなりません。

ソ連抑留二年目ごろからでしょうか、共産主義の勉強はある程度、マルクス・レーニンの赤表紙の厚いやつを、全員ではないですが、私はもらって、毎晩だっ

たかどうかははっきり記憶にありませんが、日本人から共産主義教育を受けました。そのときはそのときで、帰るために共産の勉強をしたということですよ。

また、つるし上げとかなんとかということにはナホトカに来てからちょっと聞いたことがありました。もう階級の差などは当然なくなっておりましたが、将校などはまだ襟章をそれぞれされておられたようです。私も一時期はアクチブなんかにおいて、指揮班のようなどころにおった関係で、幾らかは作業面にも好条件であったかなと思います。

ナホトカに大体一年ぐらいおり、これも帰るための一つのコースですが、無事に帰ろうと思って、一つは、より共産主義に浸透したかなというような態度で、ソ連に対してのジェスチャーで、共産主義の普及活動をやりました。ナホトカで各棟を回って、共産主義の吹聴のために講演、話をしたような記憶もありますね。

幸い私は何とか生き延びて帰ってきて、この平和な

日本でそれなりに老後は暮らしております。

いまだソ連に眠る多くの戦友のご冥福をお祈りします。